

1. そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストから出た。
2. これは、クレニオがシリアの総督であったときの最初の住民登録である。
3. それで、人々はみな、登録のために、それぞれ自分の町に向かって行った。
4. ヨセフもガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。
5. 彼はダビデの家系であり血筋でもあったので、  
身重になっているいなずけの妻マリヤも一緒に登録するためであった。
6. ところが、彼らがそこにいる間に、マリヤは月が満ちて、
7. 男子の初子を生んだ。  
それで、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。  
宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。
8. さて、この土地に、羊飼いたちが野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた。
9. すると、主の使いが彼らの所に来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らはひどく恐れた。
10. 御使いは彼らに行った。  
「恐れることはありません。  
今、私はこの民全体のためのすばらしい喜び（巨大なメガトン級の喜び）を知らせに来たのです。
11. 今日ダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。  
この方こそ主キリストです。
12. あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶に寝ておられるみどりごを見つけます。  
これがあなたがたのためのしるしです。」
13. すると、たちまち、その御使いといっしょに多くの天の軍勢が現れて、神を賛美して言った。
14. 「いと高き所に、栄光が、神にあるように。  
地の上に、平和が、みこころにかなう人々にあるように。」
15. 御使いたちが彼らを離れて天に帰った時、羊飼いたちは互いに話し合った。  
「さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせて下さったこの出来事を見て来よう。」
16. そして急いで行って、マリヤとヨセフと、飼い葉桶に寝ておられるみどりごとを捜し当てた。
17. それを見た時、羊飼いたちは、この幼子について告げられたことを知らせた。
18. それを聞いた人たちはみな、羊飼いの話したことに驚いた。
19. しかしマリヤは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。
20. 羊飼いたちは、  
見聞きしたことが全部御使いの話の通りだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

# 説教

今日は12月25日、クリスマスです。

みなさん、クリスマスというのは何の日か知っていますか？

サンタさんが来る日ではありません。

サンタさんが来た家もあったかもしれませんが、

クリスマスというのは本来サンタさんの来る日ではなく、イエスキリストさまがお生まれになったことを記念する日です。

イエスさまは今から約二千年前にお生まれになりました。

今年はイエスさまがお生まれになって二千五年目になるということで、西暦二千五年というのです。

2005年というのは、キリスト降誕以降2005年経ったということを意味しているのです。

今日の聖書のみことばに記録されている通り、

イエスさまは、日本から見ると、遠い西の国、イスラエルという国の、ベツレヘムという小さな町でお生まれになりました。

本当は、イエスさまのお父さんとお母さんはガリラヤのナザレという村に住んでおりました。

でも、ローマの皇帝アウグストの命令で、住民登録をしなければならなくなって、自分の故郷に帰らなければならなかったのです。

ナザレからベツレヘムまでは距離にしておよそ130kmです。

130kmというと、青森から盛岡までが160km、東京からだと宇都宮を越えて那須高原ぐらいまでという遠い道のりでした。

しかも当時は新幹線などありません。

歩いて行かなければなりません。

一日30km歩いたとして全部で四日、五日かかります。

それを、大きなお腹を抱えながら、しかも臨月なのに、今にも生まれそうなのに、ゆっくりゆっくり歩いて行かなければならませんでした。

そして、やっとの思いでベツレヘムに着くや、とうとうマリヤはイエスさまを産みます。

しかし、産んだと言っても、立派な病院で、ちゃんとした産婦人科で産んだわけではありません。

家畜小屋で、です。

病院どころか、普通の家で産んだわけでもない、普通の家は普通の家でも、普通の家の家畜小屋です。

「宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。」(7節)とあります。

残念なことに、どこにも泊めてくれる所はなくて、

しかたなく、生まれたばかりのイエスさまを、

布にくるんで(「布」というのはキメの細かい細布ではなく、ゴツゴツとした「荒布」のこと)、

汚い家畜小屋のしかも(家畜が餌を食べる)飼い葉桶、石でできた冷たい飼い葉桶つまり「牛や馬のお茶碗」の上に寝かせたのでした。

何とも寂しい話です。

神の子であるイエスさまが、せつかくこの地上に生まれてくださったというのに、誰も迎えてくれなかったのです。

それどころか、イエスさまの方から頼んでも、誰も家に泊めてくれませんでした。

そして、馬や牛でもあるまいし、家畜小屋で生まれ、しかも飼い葉桶に寝かされたのでした。

これがこの世の人間社会の現実でありました。

これがあからさまな神と人との関係そのものを反映しております。

私たちは、イエスさまが家畜小屋の飼い葉桶に寝かされたという話を聞いて、当時のベツレヘムの住民たちが酷いことをすると思います。

もし自分がそのベツレヘムに住んでいたら、イエスさまをそんな目には遭わせないと思います。

イエスさまを、自分の家の、一番に良い部屋にお連れして、そこに寝てもらおうと考えます。

でも、果たして本当にそうでしょうか？

みなさんの今の心の状態はどうでしょうか？

みなさんの今の生活そのものの状態はどうでしょうか？

イエスさまが中心でしょうか？

イエスさまが心の王座におられますか？

イエスさまが人生の中心におられますか？

イエスさまが生活の中心におられるのでしょうか？

イエスさまそっちのけの生活をしているのではないのでしょうか？

イエスさまと全然関係のない生活をしているのではないのでしょうか？

イエスさまが、みなさんの生活の外におられるのではないのでしょうか？

もしそうだとするならば、私たちもベツレヘムの人たちと全く同じことをイエスさまにするのだとおもいます。

ベツレヘムの人口は、当時は約五百人でしたが、五百人いても誰一人イエスさまを泊めてくれなかったのです。

たくさんいれば、誰か一人ぐらいは良い人が、という話ではありません。

たくさんいても、どんなにたくさんいても、五百人いても、本当に誰一人イエスさまを泊めてくれなかったのです。

ここにいるのは五十人ぐらいだとすると、五十人いても、果たしてどうでしょうか？

ただ、この後の展開を見ていくと、ベツレヘムの誰一人イエスさまの誕生に気がつかなかったわけではありません。

ベツレヘムの村はずれで野宿をしていた羊飼いたちがイエスさまの誕生を知るようになります。

彼らはどうやってイエスさまの誕生を知ることができたのでしょうか。

それは、天使のお告げによってでありました。

このことは、極めて重要な事実を私たちに教えてくれます。

つまり、イエスさまの降誕の意味をしることができる者は、神さまに特別に選ばれた者に限られるということです。

これは私たちも同じです。

今日世界中でどれだけ多くの人々がクリスマスをお祝いすることでしょうか？

特にこの日本に於いて。

でも、その中でクリスマスの本当の意味を知っている人はどれだけいるのでしょうか。

そして、この後見ていく通り、羊飼いたちのようにイエスさまを礼拝しに行く人はどれだけいるのでしょうか。

それを考えると、ここに集ったみなさんは特別です。

特別に神さまに選ばれた人です。

特別神さまに愛されている人です。

特別神さまに愛され、選ばれ、

「天使のお告げ」ならぬ「牧師のお告げ」を聞いて、

イエスさまの誕生の意味を知って、イエスさまを礼拝しに来たという特別な人です。

羊飼いたちも、特別な神さまの選びと啓示によってイエスさまの誕生を知らされます。

神さまの恵みによって、私たちは神さまを知るのです。

人間の努力や修行によって神さまを知ることはできません。

聖書は言います。

「事は人間の願いや努力によるのではなく、憐れんでくださる神による。」

すべては神さまの恵みによるのです。

さて、羊飼いたちに天使がお告げをする場面を見ていきましょう。

イエスさまがお生まれになったその晩、羊飼いたちはベツレヘムの近くで野宿をしながら、羊の群れを見守っておりました。

それはとても静かな夜です。

すると、突然、彼らの所にひとりの御使いが現れます。

そして、ものすごい光があたりを照らしたのです。

それで羊飼いたちは「ひどく恐れ」ます。

ちなみに、この光は、天使が発している光ではありません。

神さまが顕れる時に発せられる光です。

ですから、9節には、きちんと「主の栄光」と言われています。

神さまがおられる所にいつもあらわれている「栄光」です。

ですから、神さまがその中心におられる天国には、いつもその「主の栄光」が力強くあらわれています。

そして、その神さまが地上にあらわれる時には、天国と同じように、決まって「主の栄光」が力強くその場所にあらわれました。

例えば、モーセの時代には神さまを礼拝する「幕屋」に、ソロモンの時代には「神殿」に、この「主の栄光」が現れました。

それ以外にも、神さまが、さばきをなすとか救いをなさるといふ風に、特別にご自身の臨在を顕す時に「主の栄光」があらわれるのです。

その神さまの栄光が、

今やこのベツレヘム郊外の、

羊飼いが野宿する原っぱに顕れたのですから、それはもう本当に死ぬほどの驚きだったことでしょう。

昔の預言者イザヤではありませんが、彼らは、

「ああ、神さまにさばかれる！こんな罪深い者が神さまの栄光を見たのだからさばかれて滅びる！！」と恐怖におののいたのです。

しかし、御使いのことばは意外でした。（10節）

**「恐れることはありません。**

**今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。**

**今日ダビデの町であなたがたのために救い主がお生まれになりました。**

**この方こそ主キリストです。**

**あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶に寝ておられるみどりごを見つけます。**

**これがあなたがたのためのしるしです。」**

この天使は、「**この民全体のためのすばらしい喜び**」を知らせに来たと言うのです。

それは、ユダヤ地方は勿論のこと、

全世界にとって、

そして、この日本にとっても、

この北区赤羽に住む私たちにとっても「すばらしい喜び」を知らせるために天使は来たというのです。

それは一体何でしょうか？

それが、「あなたがたのための救い主」の誕生です。

「今日ダビデの町であなたがたのために**救い主**がお生まれになりました。

この方こそ**主・キリスト**です。」

ここで言う「**救い主**」とは、私たちを「罪から救って下さる」救い主(マタイ 1:21)のことです。

病気やリストラから救ってくれる「救い主」とは違います。

どんなに健康に恵まれても、

どんなに勉強して賢くなっても、

どんなに出世して金持ちになっても、人間最後は必ず死ぬんです。

この世のいのちは一時です。

でも、死んだらその先は永遠です。

そこで永遠に暮らさなければなりません。

罪がなければ、天国で永遠に喜んで過ごすことができるけれども、

**罪があれば**、神のさばきを受けて、例外なく地獄に落とされなければなりません。

そして、聖書は言います。

「**義人はいない。**

**ひとりもない。」**

「**すべての人は罪を犯したので神からの栄誉を受けることはできない。」**

私たちはみな罪人なのです。

例外なく罪人です。

だれひとり正しい人はいません。

だから、最初の人アダム以来、今日に至るまで、ひとり残らず、

私たち人間は、自分の罪の故に、神のさばきを受けて、永遠の滅びに突き落とされなければなりません。

ですから、つまり、人はみな例外なく罪人なのですから問題はその「罪から救われるか否か」ということが決定的ということになります。

「罪からの救い」ということが、私たち罪人にとっては決定的なことなのです。

単純に考えて、罪から救われたら、天国に行くことができます。

でも、罪から救われなければ、神さまのさばきを受けて、地獄に突き落とされなければなりません。

**イエスキリストさまは、**

**「救い主」として、私たちを「罪から救う」ために来てくださいました。**

およそこの十ヶ月前、御使いはマリヤの夫であるヨセフに言いました。

「この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」(マタイ1:21)

そして、同じ御使いが、ここでもっと声を大にして宣言します。

「あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」

イエスさまは救い主なのです。

私たちを「罪から救う」救い主です。

神のさばきを受けて地獄に行くしかない罪深い私たちを、**地獄の滅びから救い出して、天国へ入れて下さる救い主**です。

天使は、また、「この方こそ**主キリスト**です。」とも言っています。

「主」と訳されている言葉は、最高の権力者、最高の神々に使われる称号です。

ローマ帝国の皇帝も「主」と呼ばれました。

御使いはここで「この方こそ主だ！この方こそが本物の主だ！」

「世界を支配する最高権力者は、ローマの皇帝ではない、イエスキリストこそ『主』だ！」と言うのです。

「**主キリスト**」とは、(細かい話を抜きにして)要するに旧約聖書の神です。

それは、天地の造り主にして支配者、唯一絶対の神です。

人間が考え出した神ではなく、人間を造られた神です。

その昔モーセにご自身を顕して、イスラエルをエジプトから救い出した、あの神です。

その全能の神が「**主キリスト**」です。

そして、それがイエスさまだと言うのでした。

これは恐るべきことです。

つまり、天地の造り主である旧約の神が、人となってお生まれになったのです。

そして、イスラエルをエジプトから救い出したように、そのようにイスラエルを**罪と滅びから救い出す**、と言うのです。

それが「**主・キリスト**」の意味です。

それはまさに「**救い主**」でもあります。

## 10. 御使いは彼らに行った。

「恐れることはありません。

今、私はこの民全体のためのすばらしい喜び(巨大なメガトン級の喜び)を知らせに来たのです。

11. 今日ダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。

この方こそ主キリストです。

12. あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ておられるみどりごを見つけます。

これがあなたがたのためのしるしです。」

御使いは、今日生まれた人類の「救い主キリスト」が、「布にくるまって飼葉桶に寝ておられる」と説明を加えます。

この天地万物の造り主です。

イスラエルをエジプトから救い出した旧約の神です。

代々人々を震え上がらせてきたその神が地上にお生まれになった、

いったいどのような恐ろしい姿でお生まれになったかと思いきや、何と「みどりご」としてお生まれになったと言います。しかも、「布にくるまって飼葉桶に寝ておられる」というのです。

つまり、最も貧しくです。

その貧しさも半端ではない、人間並みに生まれたのではなく、まるで羊飼いたちがいつも扱っている「家畜」同然に、です。要するに、宿がないのです。

羊飼いと同じく、寝る宿がないのです。

それで、やむなく家畜小屋の飼葉桶の中に寝かせたというわけです。

しかし、驚くべきは、天使はそれが「あなたがたのためのしるし」だと言うのです。

ヨセフとマリヤにしてみると、ベツレヘムに着いたはいいいけど自分たちを泊めてくれる宿がない、

それで、しかたなく家畜小屋の飼葉桶で生まれたばかりのイエスさまを寝かせるほかなかったのですが、

しかし、天使のことばによると、イエスさまは仕方なく飼葉桶で寝ておられるのではない、

むしろ、

イエスさまは「あなたがたのためのしるし」として、自ら、敢えて、家畜小屋に生まれて飼葉桶に寝ておられると言うわけです。

つまり、あなたがたがよくわかるように、あなたがたが「これが救い主だ」とわかるように、

「あなたがたのためのしるし」として、敢えて、自分から進んで、飼葉桶に寝てくださっていると言うのです。

「あなたがた」とは誰でしょうか？

それは言うまでもなく「羊飼い」のことです。

イエスさまがお生まれになったこの晩に、イエスさまを見つけて礼拝したのは「羊飼い」以外にいなかったからです。

つまり、この天使のことばによると、イエスさまは一体何のために家畜小屋で生まれてくださったのか、

それは、要するに、この羊飼いのためなのです。

羊飼いが救い主にお目にかかって救い主を礼拝するように、家畜小屋で生まれてくださったのです。

羊飼いが救い主を発見できるように、飼葉桶で寝てくださったのです。

人類の救い主が「布にくるまって飼葉桶に寝ておられる」というこの上ない不思議、それは全て羊飼いのためであったのです。

救い主イエスさまが「羊飼い」のために「飼葉桶で寝ておられた」、このことは極めて重要な事実です。

羊飼いというのは、当時とても貧しい人たちでした。

周りの人たちは住民登録で忙しいのに、彼らはしなくてもよいのです。

社会的な信用もない、法廷で証言する資格もない、しかも神殿で礼拝する資格もない、言うなれば宿無しのホームレスのようなものです。

だから、

もしもイエスさまがヘロデ王の子どもとして王の宮殿でお生まれになっていたら、彼らは間違いなくイエスさまの所に行けませんでした。

それどころか、ごく普通の一般人の民家でお生まれになったとしても、

いったいこの誰がホームレスの羊飼いたちを

「はい、いいですよ、どうぞどうぞ入ってイエスさまを拜んでください。」などと言って快く受け入れてくれるのでしょうか。

門前払いを食らうことは目に見えています。

だから、イエスさまは、家畜小屋で生まれてくださったのです。

飼葉桶で寝てくださったのです。

これ以外に、ホームレスの羊飼いたちがイエスさまを礼拝する方法は他にないからです。

イエスさまは、ホームレスの羊飼いたちがイエスさまを礼拝できるようにと、自らも貧しくホームレスとなって生まれてくださったのでした。

このことは、今日の私たちにも大切な教訓を伝えてくれます。

イエスさまは、このことを通して、私たちに重要な真実を教えてくれています。

つまり、神さまがこのような羊飼いを愛しておられたのですから、たとえどんな人でも神さまは愛しておられるということです。

このような羊飼いで救われるのですから、どんな人でも救われるのです。

たとえホームレスでも救われます。

普段神殿で礼拝して宗教的な生活を全く送ってこなかった人でも救われます。

どんなに貧しくても救われるのです。

救いの門は大きく開かれました。

天国の門は全ての人に向かって大きく開かれたのです。

イエスさまの誕生は、まさに「この民全体のためのすばらしい喜び」なのです。

私たちが天国に入るのに、必要なのはお金ではありません。

身分も必要ありません。

良い行いも必要ありません。

人望も学歴も必要ありません。

篤い宗教心も必要ありません。

その人が良い人か悪い人かということも関係ありません。

## 天国に入るのに必要なのは、イエスさまです。

イエスさまが救い主です。

イエスさまが私たちを全ての罪から救い出してくださるお方です。

イエスさまがおられる所、そこが神の国です。

イエスさまが共におられる所、そこが天国です。

さて、今度は、

イエスさまが貧しい羊飼いのためにわざわざ飼葉桶でお生まれになった、

そのことを知った天の多くの軍勢が現れて、神さまを賛美してこう歌いました。

13. すると、たちまち、その御使いといっしょに**多くの天の軍勢**が現れて、神を賛美して言います。

14. 「いと高き所に、**栄光が、神にあるように。**

**地の上に、平和が、みこころにかなう人々にあるように。」**

御子イエスさまが地上にお生まれになった時、天国の全住民がそれを心から驚き、感動し、喜んで、思わず賛美の声を上げたのです。

使徒ペテロの手紙1章12節もあるように、

天の御使いたちも天の軍勢も、イエスさまがこの地上にお生まれになるまでは、

**イエスさまがどのように救い主としてこの地上にお生まれになるのか、知りませんでした。**

それで、どのようにイエスさまが地上に来られるのか、固唾を吞んでジッと注目していたのです。

そして、イエスさまが羊飼いのために「布にくるまって飼葉桶にお生まれになった」ことを見るや、

「なるほど！さすがイエスさま！すばらしい！」と納得し、感動して、思わず全員総出で、しかも同じ言葉で、声を合わせて、

14. 「いと高き所に、**栄光が、神にあるように。**

**地の上に、平和が、みこころにかなう人々にあるように。」** と賛美したのでした。



## 「いと高き所に、栄光が、神にあるように！」

つまり、イエスさまが人となって、しかも飼い葉桶でお生まれになることで、**神さまのすばらしさが、これまで以上にもっとも大きく現れる**、ということです。

もちろん、神さまは、天におられた時もすばらしいお方です。

この天地宇宙を創造し、これを支配して、世界を正しく治めておられます。

憐れみに富み、悩むイスラエルをエジプトから救い出されました。

神さまは、天におられた時も、この地上に救いとさばきをなして、充分にご自身の栄光をあらわしていたのです。

**でも、その偉大な神さまが、**

**天の栄光の王座を捨てて、この地上に人となって来られた時、神さまのすばらしさはもっとも大きくあらわれたのです。**

**神さまが、ほんとうに憐れみ深いすばらしいお方だ**ということが、もっとも明らかになりました。

それで、今や神さまの名前は、天国ばかりでなく、

地のどん底と言っていい地上の最も貧しい羊飼いの口を通してほめたたえられるようになったのです。

そして、イエスさまが世に来られた時、この地上に**平和**がもたらされました。

**「地の上に、平和が、みこころにかなう人々にあるように。」**

**平和**というのは、ユダヤ人にとっては特別な言葉です。

それは、最高の秩序、調和、神と人とが完全に和解した、とにかく「**天国のような最高の状態、理想郷**」を意味する言葉です。

それには、まず神さまとの関係が良くないと **平和**とは言えません。

神さまに呪われ、さばかれている状態では、もちろん**平和**はありません。

さらに言うと、神さまに罪を赦していただかなければ**平和**はないのです。

そして、イエスさまは、私たちに**平和**をもたらすために来られました。

その平和は本物の**平和**です。

嘘偽りない**平和**です。

それは、人間が武力で無理やり築いた、つまり人を殺して無理矢理築く「平和」とは違います。

当時、ローマの皇帝アウグストは、それまでないほどの「平和」な時代（ローマの平和:Pax Romana）を確立したと言われます。

しかし、その平和は、圧倒的な軍勢力や経済力によって無理やり築き上げた平和です。

無理やり周辺諸国を武力で征服して維持する平和なのです。

その権力の基盤をさらに確かなものにしようと、それで「住民登録」もするんです。

「住民登録」の目的は、「徴税」と「徴兵」です。

つまり、人々からより税金を取って、兵隊にするために「住民登録」をするんですよ。

そして、そのためにマリヤとヨセフも強制的に130kmも離れたベツレヘムまで旅しなければならなかったんです。

それは人に血を流させて無理矢理築く平和です。

これが人間の築き上げた、人間の力で考えつく、人間がなし得る、最高の「平和」です。

でも、こんな平和は、実は本当の平和ではありません。

アメリカがやっているように、強大な軍勢力で無理やり敵を征服しても、

イラクのように、征服された方は征服した相手に対する憎しみが積もるばかりで平安がありません。

征服した方も、絶えず征服した敵に対する警戒の目を光らせて、これもまた平安がありません。

このような関係では、真の平和は実現しようがありません。

実際に、ローマ帝国に於いても、

ローマに敵対する勢力ばかりでなく、自分たちの中にも権力争いがあり、絶えず争いを繰り返し、最後は滅びることになるのです。

イエスさまがもたらす平和は、こんな平和ではありませんでした。

こんな見せかけの平和ではありませんでした。

イエスさまがもたらす平和は、真の平和、本当の平和です。

それは、圧倒的な軍事力によって無理やりねじ伏せて、相手を征服して実現する平和ではありません。

人を殺す平和ではなく、ご自分がいのちを捨てる平和です。

人を十字架に架けて殺す平和ではなく、ご自分が十字架で死なれて、私たちの罪を贖う、そういう平和です。

ご自分が私たちの身代わりに神さまのさばきを受けて、

私たちが受けるべき罪の罰をその身に負って帳消しにしてくれる、そういう平和です。

他人の犠牲の上に築く平和ではなく、ご自分の犠牲の上に築く平和、それがイエスさまのもたらした平和なのです。

そのような十字架による平和は、イエスさまが「布にくるまれ、飼い葉桶の中で」お生まれになった事実に象徴されています。

人から冷たくされて、いったい誰が黙っているのでしょうか。

ベツレヘムの五百人の住人のうち誰一人イエスさまを泊めてくれる者はありませんでした。

「宿屋には彼らのいる場所がなかった。」の「宿屋」とは「客間」のことです。

客間たった一つ空けて泊めてくれる家もなかったのです。

家畜でもあるまいし、家畜同然に飼い葉桶で寝る以外になかったのです。

もしもローマの皇帝アウグストにこんなことをしたら、どうなるでしょうか。

また、イスラエルの王であるヘロデにこんな仕打ちをしたら、どうなるでしょうか。

これは間違いなく死刑でしょう。

しかもベツレヘムの町ごと火で焼き討ちにされるに違いありません。

実際にヘロデはベツレヘムの二歳以下の子どもたちを皆殺しにしているのです。

でも、イエスさまはどうでしょうか？

もちろん、イエスさまはそんなことはお怒りになりません。

人のひどい仕打ちをそのまま甘んじて、受け入れました。

飼い葉桶ならそれでもいいよと、そこでお生まれになりました。

これがイエスさまです。

そこには、**罪の赦し**があります。

**神の愛**があるのです。

イエスさまは、そうやって私たち罪人への愛を明らかにしておられます。

そして、このイエスさまが支配している所、平和があります。

それで、天国には平和があるのです。

みんな喜んでいます。

神さまを手放して賛美しています。

そして、歌っているんです。

彼らは、無邪気に、地上の血なまぐさい現実と全く関係なしに讃美歌を歌っているのです。

どうして、こんなにおめでたく、無邪気に、いかにも楽しそうに歌っていられるのでしょうか？

それは、彼らに平和があるからです。

そして、羊飼いたちが見た「天の軍勢」のメンバーというのは、実はこのイエスさまに罪赦された人たちの集団だからです。

天国というのは、イエスさまに罪を赦していただいた人たちの集まりです。

生まれながらの聖人が天国に行くわけではありません。

彼らも地上に生きていた時は、私たちと全く同じく罪人でした。

彼らも本来はあまりの罪深さに神のさばきを受けて地獄に行かなければならない存在でした。

でも、イエスさまによって救われたのです。

救い主イエスさまの憐れみによって救われました。

イエスさまが後に十字架に架かって彼らの罪を贖い、神さまに罪を赦してもらったから、彼らは天国に入ることができたんです。

そして、のんきに、平安に、讃美歌を歌っていられたのです。

みなさん、天国の本質は「罪の赦し」です。

天国とは、善人たちの集まりではありません。

罪赦された者の集まりなのです。

教会も同じです。

教会も天国も、イエスさまに罪を赦していただいた者たちの集まりなんです。

だから、そこには喜びがあります。

イエスさまに罪を赦していただいたからです。

私たちは罪深いけれども、イエスさまに罪を赦していただいたからです。

天使はイエスさまのご降誕を「この民全体のためのすばらしい喜び」と呼びました。

「すばらしい喜び」の直訳は、「巨大な、メガトン級の喜び」です。

天国の喜びはまさに「巨大な、メガトン級の喜び」です。

そして、その喜びがこの地上にも来た！と言うのです。

それは、別の言い方をすると、**救いの喜びであり、罪を赦された喜び**です。

天国の輝かしさは、イエスさまに罪を赦していただいた喜びが満ちあふれているから、全員光り輝いているんです。

それがまさに羊飼いを照らした「主の栄光」です。

そこには本当の自由があります。

喜びがあります。

踊りたくなります。

罪を赦してくださったイエスさまをほめたたえる賛美が絶えないんです。

そして、イエスさまに罪を赦していただいたから、喜びと感謝をもって互いに赦し合います。

仕え合います。

誰が一番だとか、どっちが上だとか、そんな馬鹿な争いが全くないのです。

天国の支配者であられるイエスさまご自身が、最も低くへりくだられたお方だからです。

先に立つ者は、みなのももべになるんです。

ですから、そこには完全な平和があります。

この平和が世にきました。

神の国がこの地にきたのです。

それがベツレヘムであり、飼葉桶でありました。

この時、天の多くの軍勢は大勢登場していますが、しかし、実は肝心の神ご自身は登場していません。

神の国の中心である神さまはいったいどこにおられるのでしょうか。

それが実はイエスさまでした。

「主の栄光」に輝く御使い、まばゆく光り輝く天の多くの軍勢は、実はこの地上のイエスさまの栄光に照らされて光り輝いているのです。

ひとりの「みどりご」としてお生まれになった、貧しいイエスさまの栄光を反映しているのです。

つまり、イエスさまがおられる所、

そこは天国であろうと地上であろうと、

たとえ王宮だろうと馬小屋であろうと、

あるいは貧しい私たちの家庭だろうと、

罪深い私たち自身の人生であろうと、

イエスさまがともにおられるならば、そこは間違いなく**天国**なのです。

**神の国**です。

平和な**神の国**なのです。

最後に、確認しなければならないことがあります。

この天国の「平和」は、地上に於いてはどのような人にもたらされるのでしょうか？

それは「**みこころにかなう人々**」にもたらされます。

天の軍勢はこう賛美しました。

**「地の上に、平和が、みこころにかなう人々にあるように。」**

この「みこころにかなう人々」という言葉は、もともと「気に入った人々」という意味の言葉です。

それでは、どのような人が神さまの「気に入った人」「みこころにかなった人」なのでしょうか？

神さまはどのような人を「気に入られる」のでしょうか？

**それは、この羊飼いのような人です。**

すなわち、天使のお告げをそのまま素直に受け入れ、信じる人です。

そして、今日聞いた天使のお告げの通り、イエスさまがこの私を罪から救うために産まれて下さったと信じる人です。

ふつう、私たちが「神さまに気に入られる人」という時、それは何か「良い行いをする人」を連想します。

神さまの前に「良い行いをした人」とか「人徳優れた立派な人」が「御心にかなう人」と考えます。

でも、そうではありません。

なぜなら、神の前に正しいと認められる人はこの世に一人もいないからです。

ですから、いったいどういう人が神さまに気に入られる人なのか、**それはこの羊飼いのような人です。**

羊飼いのように、天使のお告げをそのまま素直に受け入れて信じる人です。

イエスさまを自分の救い主と信じる人です。

羊飼いたちは、この天からの啓示を受けた時、少しも疑うことなく、すぐにイエスさまを探しに出かけました。

15. 御使いたちが彼らを離れて天に帰った時、羊飼いたちは互いに話し合った。

「さあ、ベツレヘムに行って、主が**私たちに知らせて下さったこの出来事を見て来よう。**」

16. そして**急いで行って**、マリヤとヨセフと、飼葉桶に寝ておられるみどりごとを捜し当てた。

この通り、羊飼いたちは、何のためらいもなく、**天使の言う通りに**イエスさまに会いに行きました。

夜番をしていた羊たちはどうしたのかわかりませんが、

そこに置き去りにしていったのか、とにかくそんなことも構わず、彼らは「急いで行った」のです。

彼らは、「**あなたがたのために**救い主がお生まれになりました。」という天使の言葉を、

「そうですか、わかりました。」と、ただその通りに「**私のために救い主がお生まれになった**」と単純に信じたのです。

そして、イエスさまとお会いして、

「羊飼いたちは、

**見聞きしたことが全部御使いの話の通りだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った(20)**」のです。

彼らは、天国の天使たち、天国の多くの人たちと同じように、

「いと高き所に、栄光が、神にあるように、

地の上に、平和が、みこころにかなう人々にあるように。」と、**神をあがめ、賛美しながら帰って行った**のでした。

こうして、**彼らの人生に** 神の国が来ました。

平和が来ました。

救いが来たのです。

今日ここに集うみなさんひとりひとりも、この同じ祝福に招かれています。

天使は言いました。

「この民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。

**あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。」**

この天使による天からの啓示が無ければ、イエスさまはただの赤ん坊です。

しかも、単なる宿無しのみすばらしい赤ん坊に過ぎません。

でも、羊飼いたちのように、

今日聞いた天使による天からの啓示を信じるならば、みなさんも羊飼いと同一恵みにあずかることができます。

みなさんの人生に平和が来ます。

神の国が到来するのです。

みなさんが天国に入るのに必要なのは、良い行いではありません。

お金も学歴も必要ありません。

**みなさんが天国に入るのに必要なのは、イエスさまです。**

羊飼いのように、イエスさまを「自分の救い主」と信じるならば、みなさんも救われます。

みなさんの人生は、**イエスさまとともに歩む人生**となります。

平和な、天国のような、神の国の中にある人生が始まります。

イエスさまは後にこう言われました。

**「時は満ち、神の国は近くなった。**

**悔い改めて、福音を信ぜよ！」**

私たちが、自分中心で生きていたそれまでの生き方を悔い改めてイエスさまを信じる時に、神の国が私のところに来るんです。

羊飼いのように、そのまんま素直に、「心貧しく」イエスさまを受け入れる時に、永遠の神の国が来るのです。

ここに集うみなさんひとりひとりが、

羊飼いのように、

「みなさんを罪から救うためにお生まれになった」イエスさまを受け入れて永遠のいのちに与り、

羊飼いのように、永遠の平和がみなさんの人生に来るよう、イエスキリストの御名により祈ります。

天の父なる神さま。

尊いご自身の御子イエスさまを、私たちの救い主として与えて下さったあなたをあげめます。

今日は、私たちにクリスマスの本当の意味を教えて下さいました。

羊飼いが、自分のために救い主がお生まれになったことをそのまま信じて、天国に行く祝福を受けたように、

私たちもまた、彼らと同じくイエスさまを信じて、天国に行くことのできる祝福にあずかることができますように。

そして、神の国の「平和」を得て、

心から神さまをほめたたえ、

その喜びが私たちの家庭を満たし、

職場を満たし、

学校を満たし、

この国を満たし、

神さまが造られたこの世界を満たして行くよう、心から祈ります。

ここに集われたおひとりおひとりに、

救い主イエスキリストにある救いの喜びと平和が満ちあふれるよう、イエスキリストの御名により祈ります。